

平成 29 年度

第 1 回

地域自立のための「人づくり  
・学校づくり」実践委員会

議事録

平成 29 年 5 月 23 日 (火)

第1回 地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 議事録

1 開催日時 平成29年5月23日(火) 午前10時から午前12時まで

2 開催の場所 県庁別館9階特別第一会議室

3 出席者 委員長 矢野 弘典  
副委員長 池上 重弘  
委員 片野 恵介  
委員 加藤 暁子  
委員 加藤 百合子  
委員 白井 千晶  
委員 杉 雅俊  
委員 竹原 和泉  
委員 藤田 尚徳  
委員 マリ クリスティーナ  
委員 宮城 聡  
委員 藪田 晃彰  
委員 渡部 清花

知事 川勝 平太

4 議 事

- (1) 副委員長選出
- (2) 報 告 平成29年度の検討事項及び年間スケジュール(予定)
- (3) 意見交換 社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」の奨励  
(子供たちが農林水産業、工業、商業等に触れる機会の創出)
- (4) その他 産業人材確保・育成プラン(仮称)

【開 会】

事務局： ただいまから、第1回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を開催いたします。

本日はお忙しい中、当委員会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

私は、本日司会を務めます文化・観光部総合教育局の長澤と申します。よろしくお願いいたします。

初めに、お手元の次第がとじてございます資料を御覧ください。

3枚めくっていただきますと、左肩に資料1と書いてございます地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会設置要綱がございます。当委員会では、第3条第2項の規定にありますとおり、委員は知事が委嘱することになっておりまして、また、委員の任期につき

ましては、第4条第1項の規定により、委嘱の日から当該年度の末日までとなっております。

このため、本年度新たに委員に就任された方だけでなく、昨年度から引き続きの委員の皆様にも改めて委嘱状を交付し、お手元に配付してございます。御確認をお願いいたします。

また、当委員会の委員長は、第5条第2項の規定に基づきまして、知事の指名により矢野弘典委員をお願いをしております。よろしくをお願いいたします。

次に、資料を1枚お戻りいただきますと、実践委員会の委員一覧がでございます。

昨年度の委員のうち、奥島孝康様、後藤康雄様、鈴木竜真様が退任され、新たに名簿の中段、一般社団法人静岡県商工会議所連合会専務理事・事務局長の杉雅俊様、名簿の下から三つ目の一般財団法人静岡県サッカー協会副会長の山本昌邦様、その下の東京大学大学院総合文化研究科修士課程在学中の渡部清花様に御就任いただいております。

また、本日は仲道委員、埴委員、山本委員、渡邊妙子委員が所用により欠席となっております。

なお、本日は机上に「世界クラスの資源・人材群」のほか、6月17日にエコパスタジアムで開催されるラグビー日本代表とアイルランド代表とのテストマッチの御案内を配付してございます。

それでは、開会に当たりまして、知事から御挨拶を申し上げます。

川 勝 知 事： どうも皆様、おはようございます。今日は御多用の中、御出席賜りましてありがとうございます。

この実践委員会、今年度における最初の委員会ということに相成ります。この実践委員会としましては、今年でもう3年目に入ります。実は、その前に検討委員会というのがございまして、ほぼ同じ形のメンバーでございますけれども、これを入れますと4年目に入ることでございます。

今日はこちらに教育委員会の委員のお1人である興先生がオブザーバーとしていらっしゃいますけれども、今日は杉委員、それから渡部委員、新たに委員に御就任賜りまして、誠にありがとうございます。

委員御継続の方々には既に御承知のとおりでございますけれども、実は法律によりまして、教育委員会、どちらかという学校が独立しているということで、教育の中立性、それから安定性、継続性を確保するために、政治の介入を許さないという固い決意のもとに、首長がいろいろな横やりを入れないようになってきたわけですが、これからはやっぱり社会総がかり、地域ぐるみでやるべきだという機運の中で、総合教育会議というものが法律によって定められました。

そして、市、町、県など、地方自治体の教育委員会に首長が出席して意見を述べるができること、そういう時代になっているわけです。

そういう流れを踏まえまして、私どもはまず、そこにどういう意見を言うのがいいのかということで、地域とともにある学校づくり検討委員会を設けたわけです。そして、その検討委員会には、今日皆様方、名簿を御覧になったらわかりますように、社会全体の意見が反映されるように各界の方たちに入らせていただいております、それを私はしっかり拝聴いたしまして、その御意見を持って総合教育会議に臨むというふうにしてきたわけでございます。

そして、当初は、まずは検討しようということでしたが、総合教育会議が始まりまして、これを地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会と名前を変えまして、今年3年目を迎えたという形でございます。

ですから、私は皆様の御意見をしっかり拝聴して、教育委員会へ持っていくと。ただし、それでもひょっとすると川勝が変な考えを総合教育会議で言うかもしれないということで、これまでの総合教育会議におきましては、矢野委員長、あるいは池上副委員長に御出席賜りまして、そこで全体の意見をどちらかに言っていただくと。そして、私も御説明申し上げるという形でやってまいりまして、恐らくこれは全国でも最も模範的に進んでいるものではないかと存じている次第でございます。

是非新委員におかれましても、そのような趣旨を踏まえていただきまして、存分にそれぞれの信ずるところをお語りいただきまして、青少年たちのレベルが上がっていくように賜りたいと存ずる次第でございます。

あと、座らせていただいて、これまでのところと、それから今日の議題について御説明させていただきます。

昨年度の結果でございますけれども、この実践委員会からいただきました御意見に基づきまして、教職員の多忙化を解消し、子供たちにきめ細かな指導ができるよう、静岡式35人学級編制、これは全国に先駆けて、小学校1年から中学3年生まで1学級35人以下にするということを、もう四、五年前に達成いたしました。

ところが、実は35人以下にするけれども、25人以下になると集団教育ができないのではないかとということで、下限は25人と決めてあったのです。そうすると、仮に40人しかいないとなれば、35人と10人になったり、20人と20人になったりして、結局35人学級ができなくて困るということになりましたものですから、25人の下限を撤廃してくれということで、この委員会で25人という下限の人数設定をやめるべしと言われまして、それを受けまして総合教育会議に持っていきまして、オーケーということで、今年度、平成29年度から3年かけまして、下限を撤廃することと相成りました。

また、子供たちが家庭学習の習慣を身に付けられるよう、大学生等の地域人材を活用して、学習支援の場である「しずおか寺子屋」を創

出するなど、社会総がかり・地域総ぐるみで子供たちを育てていく取組をさらに進めることができました。

さて、本日のテーマでございますけれども、昨年度、第5回総合教育会議におきまして、次の四つのテーマにつきまして、本年度の総合教育会議で御協議いただくことが決まっております。

まず第1、社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」の奨励、いわゆる学問・学術というものに対しまして、技芸というものを磨く実学のうち、子供たちが農林水産業、工業、商業等に触れる機会を創出しよう。

二つ目、社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」の奨励のうち、子供たちが文化・芸術・スポーツに触れる機会をもっと創出しよう。

三つ目、「有徳の人」づくりに向けた就学前の教育を充実させるべし。

四つ目は、新たな「教育に関する大綱」を今年つくらねばなりません。それをお決めいただきました。

本日はこの中から、社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」の奨励について、御意見を賜りたいと存じております。

学力テストに象徴されますように、これまで英数国理社、言わば知性を高める学習に偏重した教育が行われてきたという認識が持たれております。

一方で、農林水産業、工業、商業、芸術、スポーツ、最近では藤井君の14歳、18連勝と。あれも「技芸を磨く実学」ということで、それは少年少女に大きな、言ってみれば励ましといいますか、将棋熱を喚起しているのは御承知のとおりでございます。こういう体で覚える「技芸を磨く実学」も大切であると存じております。

こういう考えをもちまして、本日は「技芸を磨く実学」の奨励のうち、子供たちが農林水産業、工業、商業等に触れる機会の創出について、委員の皆様方の御意見を賜りたく存じます。

また、多くの産業で人材不足が課題になっておりますために、県では「産業人材確保・育成プラン」、これは仮称でございますけれども、今取りまとめているところでございます。

「技芸を磨く実学」に触れて、本県の産業、あるいは社会の担い手となる子供たちをどのように育ていけばよいのか、皆様の御意見を賜りまして、県のプランに反映させていきたいと存じます。

繰り返しますけれども、私は、教育に対する政治の中立性を保障するために、この総合教育会議に臨むに当たりまして、県内外で立派な実績を上げられている皆様方の御見識をしっかりと踏まえた上で、総合教育会議に臨むこととしております。

この実践委員会でいただいた意見を踏まえて、総合教育会議で私が発言をし、御提言いただいたことを実践してまいりますので、本日も活発な御意見を賜りたく存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

す。

事務局： ありがとうございます。

次に、矢野弘典委員長から御挨拶をいただきます。よろしく願いいたします。

矢野委員長： 昨年度から引き続きまして、委員長を仰せつかりました矢野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

今年度から、杉さん、渡部さん、そして今日は御欠席でありますけれども、山本さんに委員として一緒にこの問題に取り組んでいただけることになりまして、大変嬉しく存じております。よろしく願いいたします。

今日はもちろんおいでになっておりませんが、これまで実践委員会に2年間御貢献いただいた奥島さん、後藤さん、それから鈴木さんに心からお礼を申し上げたいと思います。

この委員会の経緯については、今、知事からお話があったとおりです。基本の精神というのは、教育の大綱にはつきりうたわれています。「富国有徳のくにづくり」という高い志のもとに、有徳の人づくりをどうやっていくかという大きな方針、基本の理念というものは確立しているわけでありまして、それをどういうふうに具体化するかが私たちの直面する課題です。

そういう意味で、小さく始めて大きく育てるという理念に基づいて、どこから始めれば本当に変わっていくかということをお考えいただくということでやって参りました。

その実績として、先ほど御紹介があったほかにもスポーツの人材バンクの構築、それから磐田地区での地域スポーツクラブの設立、それから静岡県は学校での読書活動がなかなか活発で既に行われておりますけれども、声を出して読むという朗読の時間を増やすことも始まっているわけでありまして。

これから、こうした小さな芽が大きくなって行って、県全体を変えていく力になるだろうと私は信じております。

知事をはじめといたしまして、教育委員会の先生方におかれましては、私どもの提言について真正面から受け止めていただいて、それを具体的に施策という面で反映していただいていることに心から感謝しております。

是非引き続き、各分野のエキスパートの皆様のお意見をいただきまして、私はそのまとめ役を務めたいと思っております。

教育については全く素人で、民間企業に育って今日に至っておりますけれども、何十年も暮らして、最後は社長や会長になって、ずっと思い続けていたことは「企業は人なり」ということです。人が企業の宝なのです。ですから、若い管理者のときも、トップになっても、新

人を迎えたなら、それをどうやって鍛えるかということを実際に一生懸命やってきましたつもりです。

ずっとやっているうちに、はっと気が付いたのは、高等学校や大学を卒業してからも鍛えがいはあるのですけれども、少し遅いのではないかという思いを持つようになりまして、もっと前から、特に心の面を鍛えるにはどうしたらいいかということをつねに問題意識として持っておりまして、それで7年前に自宅を開放して寺子屋を始めました。古典の読書を、小学生の子供たちに教えるようになっていきました。凶らずも、静岡県のお手伝いをするうちに、教育改革をやろうという知事の強い熱意に接しまして、今のお仕事を仰せつかり、大変光栄に思っておりますし、かねて考えておりましたことを少しでも実現できる場がここにできたのかなと、感謝している次第でございます。

私自身もいろいろ考えることがあります、やはりこの2年間、3年間で振り返ってみまして、皆様方から提案、提言された言葉、案というものが、いかに力のあるものか実感しております。

どうやって具体化ができるかという視点から捉えて、是非とも具体化していきたいと思っております。どうぞよろしく御協力をお願いいたします。

事務局： ありがとうございます。

次に、初めて委員に御就任いただく皆様から御挨拶をいただきます。恐縮ですが、委員一覧の順に、上から順番にお願いいたします。

まずは、杉雅俊委員、よろしく申し上げます。

杉委員： 商工会議所連合会の専務理事、事務局長をしております杉と申します。よろしく申し上げます。

県下には、浜松から伊豆の先の下田まで15の会議所があります。経済界と県行政との間の潤滑剤のような仕事が、私たちの仕事です。経済界の声を行政に届ける、行政の声を経済界に伝える、こんな仕事をしております。

教育ということで見ますと、うちの会の会長が産業教育振興会の会長を仰せつかっていまして、その関係がありまして、私もその理事をやっております。

この組織に来ましたのが平成15年でありまして、常務理事、事務局長から数えると14年半かかわってきましたので、それらの経験を生かして、何かよい意見を言えればよろしいかなと思っております。よろしく申し上げます。

事務局： ありがとうございます。

次に、渡部清花委員から御挨拶をいただきます。

渡部委員： こんにちは。今回、初めて委員に就任させていただきました渡部清花と申します。

川勝先生が学長をされ、今、池上先生が副学長をされている静岡文化芸術大学を卒業するまで、静岡県で生まれ育って、今、東京の大学院で勉強をしています。

それと同時に、日本に逃れてきた難民の方々の自立支援をする活動をしておりまして、それは静岡文化芸術大学にいたころ、ブラジル人の友人たちと話していたことが大きく生きています。

私自身は、実家が子供の居場所づくりをしているNPOということもあり、学校が好きで、先生たちが好きで、クラスメートと一緒に学んでいたものの、家に帰ると学校に行けなかったり、家庭に帰れなかったりする子供たちと一緒に暮らしていたというのもあって、そういう観点で今回の人づくり・学校づくりということに、この大好きな静岡県に何か貢献できたらと思っております。よろしく願いいたします。

事務局： ありがとうございます。

なお、清宮委員につきましては、本日、急用のため御欠席との御連絡をいただきました。

それでは、議事に入りたいと思います。

これからの議事進行は、矢野委員長をお願いいたします。よろしく願いいたします。

矢野委員長： それでは、次第に基づきまして、本日の議事を進行します。

まず、この実践委員会設置要綱第5条第3項に基づきまして、副委員長を指名したいと思います。

昨年度に引き続きまして、池上委員に副委員長をお願いしたいと思いますが、池上委員、よろしいでしょうか。

池上委員： はい。承りました。

矢野委員長： ありがとうございます。

それでは、池上委員に副委員長をお願いすることといたします。本年度もよろしく願いいたします。

それでは、副委員長席にお移りいただきたいと思っております。

(池上副委員長が副委員長席に移動)

矢野委員長： それでは、報告事項に入ります。

平成29年度の検討事項及び年間スケジュール（予定）につきまして、



事務局から説明をお願いします。

事務局： それでは、事務局から本年度の実践委員会の検討事項及び年間スケジュールについて説明いたします。

お手元の資料の2ページ、資料2を御覧ください。

「1 検討事項」でございます。

先ほど知事から説明がございましたが、3月13日の第5回県総合教育会議におきまして、4項目の検討事項が決定いたしました。

社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」の奨励。この項目は、子供たちが農林水産業、工業、商業等に触れる機会の創出と子供たちが文化、芸術、スポーツに触れる機会の創出の2項目に分けて検討いたします。

そして、有徳の人づくりに向けた就学前教育の充実、新たな教育に関する大綱、以上の4項目でございます。

したがって、この4項目につきまして、総合教育会議に先立って、実践委員会で御検討いただく予定でございます。

次に、下の表ですけれども、「2 年間スケジュール」について説明いたします。

本年度、実践委員会は年4回の開催を予定しております。各回の議事内容はこちらに記載した内容を予定しておりますが、協議の進捗状況等により、変更になることがございます。

以上で事務局からの説明を終わります。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

資料の内容も含めまして、ただいまの説明について何か御質問はありますでしょうか。

(質問なし)

矢野委員長： 特に御質問がないようですので、次に進みますけれども、途中でも、もし思い付かれたことがあったら遠慮なく御発言ください。

本日の意見交換のテーマは、社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」の奨励でございます。

それでは、事務局から配付資料の説明をお願いします。

事務局： それでは、事務局から説明いたします。

お手元の資料の3ページを御覧ください。

資料3に本日の論点を記載してございます。初めに、論点の背景について説明いたします。

本県の未来を担う「有徳の人」の育成を進めるに当たっては、英数国理社等の知性を高める学習だけでなく、小さな頃から農林水産業、

工業、商業、芸術、スポーツ等の技芸を磨く実学に触れる機会を与え、子供たちの興味や関心を引き出し、一人一人の能力や適性、意欲に応じた多様で柔軟な教育をより一層展開する必要がございます。

このうち、本日は特に、子供たちが農林水産業、工業、商業等に触れる機会をどのように増やしていくかにつきまして、御意見をいただければと存じます。

論点としまして、事務局から、次の二つの点を御提案させていただきます。

一つ目の論点は、地域で活躍するプロフェッショナル人材の教育現場での活用でございます。

学校の教育活動において、地域のプロフェッショナル人材をどのように活用していくかについて、御意見をいただければと存じます。

二つ目の論点は、インターンシップ等、子供たちが仕事の現場を体験する機会の充実でございます。

子供たちが学校の外で地域の魅力ある産業等を学ぶために、子供たちの地域での学びをどのように活発化し、深めていくかにつきまして、御意見をいただければと存じます。

次に、資料の4ページを御覧ください。

資料4としまして、県の計画における社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」の奨励に関する施策とその位置付けをまとめてございます。

次に、別冊になりますけれども、別冊の参考資料1を御覧ください。参考資料1の1ページをお開きください。

小・中学校の授業の実施状況等についてまとめてございます。

まず、1は小学校、2は中学校の法定の標準授業時数でございます。各学校では、この標準授業時数を上回るように計画を立てて授業を実施しております。

実技系の教科を太枠で囲んでございますが、座学中心の教科と実技系の教科は、学年ごとにおおむね2対1から3対1の比率で実施されております。

また、資料にはございませんが、理科の授業の実験につきましては、学校、学年ごとに異なりますが、小学校ではおおむね3割から5割、中学校ではおおむね6割の授業で実験を取り入れているとのことでございます。

次に、2ページを御覧ください。

教育活動支援のための外部人材の導入状況について、県立学校及び政令市を除く市町立学校の平成28年度の状況をまとめてございます。

まず、1の(1)の①にございますとおり、ほぼ全ての学校におきまして、学校の教育活動に外部人材を活用しております。また、②にございますとおり、全ての校種におきまして、9割以上の学校が授業で外部人材を活用しております。

次に、4ページを御覧ください。

2の(1)にございますとおり、多くの学校が勤労観や職業観を育む教育を学校全体、あるいは特定の学年で計画的に実施しております。下の2の(2)の①を見ますと、中学校ではほとんどの学校が職場体験を実施しております。

次に、5ページを御覧ください。

5ページの(3)の①を見ますと、小学校では7割弱、中学校では5割強の学校におきまして、職場見学を実施しております。

次に、6ページを御覧ください。

(5)を見ますと、高等学校では6割強、特別支援学校ではほとんどの学校におきまして、インターンシップなどの就業体験活動を実施しております。

次に、7ページから12ページにかけましては、今回の論点に関する県の取組事例についてまとめてございます。

このうち、小・中学校と高等学校におけるキャリア教育の取組について詳しく説明いたします。

13ページを御覧ください。

まず、小・中学校におけるキャリア教育の取組でございます。

1にありますとおり、小・中学校ともに総合的な学習の時間等を活用し、地域と関わりを持ったキャリア教育を行っており、2の具体的な実践事例を見ますと、例えば、1の掛川市では、中学3年間で系統的に捉えて、地元を学び、地元で働き、地元の将来について提案する「掛川学」に取り組んでおります。

また、2の磐田市では、市内全小・中学校をコミュニティ・スクールに指定し、地域の人材を発掘、活用して、「ようこそ先輩」「未来授業」と称して、職業講話や体験活動を実施しております。

次に、15ページを御覧ください。

高等学校におけるキャリア教育の取組でございます。

1にありますとおり、県内企業の実力を肌で感じ、将来、県内企業で活躍する意識を高めるために、県内企業の海外工場におきまして、高校生の就労体験等を実施しております。

次に、16ページの下段の「4 ふるさと人材育成事業」を御覧ください。

郷土で活躍する人材を育成するために、学校が行う職業講話等に県内で活躍する経営者等を講師として派遣しております。

次に、17ページを御覧ください。

下段の「6 生徒のアイデア募集・コンビニとの連携による商品開発」を御覧ください。

高校生の地域に対する理解を深めるとともに、社会への参画意識の高揚を図るため、地域の活性化等に資するアイデアの提案と、その実践事例のコンテストを実施しております。

また、コンビニエンスストアと連携し、高校生が新商品の企画から

販売までを体験する取組を実施しております。

次に、机上に、参考としまして「県立高等学校と産業界等との連携の状況」をお配りしております。横長の資料でございます。

各高等学校が独自に行っております個々の企業等との連携状況について取りまとめてございます。

それから、もう1種類、県教育委員会が作成しました冊子「地域学」をお配りしております。この冊子では、地域学に取り組む高校生の先進的な事例を掲載しておりますので、御参考にしていただければと存じます。

また、県が実学を学ぶ場として設置しております農林大学校の卒業生の就職状況と主要な就職先であります農業法人の状況につきまして資料を配付してありますので、御覧いただければと存じます。

次に、実学及び文化芸術の分野での、本県の高校生の活躍の状況につきまして、担当課から報告をいたします。

知事の後ろのスクリーンで報告いたしますので、恐れ入りますが席の移動をお願いします。

教育委員会： 高校教育課長の小野田と申します。よろしく願いいたします。

お手元の参考資料1の19ページを御覧いただきたいと思っております。

私からは、全国で輝いた技芸の星と題しまして、平成28年度の1年間におけます、スポーツを除いた実学及び文化・芸術の分野において、本県高校生の活躍、全国レベルでの受賞の数々について御報告をさせていただきます。パワーポイントを使って御説明をいたします。

初めに、農業分野でございます。

田方農業高校の生徒が、フラワーデザインコンテストで農林水産大臣賞、押し花コンテストでは文部科学大臣賞を受賞いたしました。押し花は、全国3連覇となっております。

続きまして、日本学校農業クラブ全国大会におきましては、静岡農業高校と下田南伊豆分校のワサビ農家の娘さん、高羽さんが文部科学大臣賞を受賞しています。

続いて、高校単位におきましても、富岳館高校が震災後の貢献によりまして、高校環境化学賞の最優秀賞を受賞し、磐田農業高校が全日本学校関係緑化コンクールで農林水産大臣賞を受賞しております。本県の農業高校は、まさに全国トップクラスだと考えております。

続きまして、商業分野でございます。

浜松商業高校が大活躍をいたしました。全国高校珠算・電卓競技大会では団体優勝2連覇、全国高校速記競技大会、全国高校簿記コンクールでも優勝を飾っております。

続きまして、工業の分野でございます。

高校生ものづくりコンテストの旋盤作業部門では、科学技術高校の山本さんが準優勝、浜松城北工業高校の生徒も活躍をいたしました。

ものづくり県の後継者も育っております。

続きまして、文芸の分野でございます。

全国高校英語スピーチコンテストの帰国子女の部におきまして、静岡高校の一居さんが優勝をいたしました。外務大臣賞を受賞しております。

続きまして、NHKが主催をいたします全国高校放送コンテストのラジオドキュメント部門では、浜松市立高校放送部が優勝をし、実際に放映をされました。また、新聞、演劇部門でも活躍をしております。

続きまして、美術・書道の分野では、ふじのくに芸術祭2016で清水南高校の小川さんが一般にまじりまして、ふじのくに芸術祭賞を受賞し、県民文芸誌の表紙を飾っております。あと、書道と漫画でも大臣賞を受賞いたしました。

次は音楽分野です。

和の音楽分野では、全国高校総合文化祭で三島北高の箏曲部が文化庁長官賞を受賞し、国立劇場で演奏披露をいたしました。また、津軽三味線でもトップをきわめる高校生が出ております。

洋の部門でも、チアダンスにおきまして、全米最大のイベントで日大三島高校が優勝を飾っております。軽音楽、いわゆるバンドでは、軽音楽甲子園で静岡西高校のバンドが文部科学大臣賞を受賞いたしました。

このように、本県高校生は実学、それから文化・芸術分野で多くの活躍をしております。

また、昨年度から高校生を支援する新たな取組を行っております。グローバル人材育成基金による事業が始まりまして、昨年は海外インターンシップなど93人の海外派遣を支援いたしました。本年度は200人の支援を予定しております。

昨年10月に開催をいたしました、ふじのくに実学チャレンジフェスタも、本年度は10月14日土曜日に浜松市で開催をいたしまして、高校生の活躍をアピールしていきたいと考えております。

今後とも、高校教育に社会総がかりの御支援をお願いしたいと思います。以上で私からの説明を終わります。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

お話を聞いておりますと心躍りますね。若い人たちにチャンスを与え、またそれを激励する、そういう場が生まれれば、どんどんその才能が伸びていくということが証明されているように思います。

これから私たちが取り組む課題についても、そういう子供たちの顔を思い浮かべながら、論議を進めていったらいいのではないのでしょうか。

ただいまの説明につきまして、御質問があればお願いします。

(質問なし)

矢野委員長： 早速意見交換に入りますので、その過程で何かあれば、また御質問いただけますと、事務局からお答えいただけると思います。

それでは、お配りしました資料3の、事務局が用意した二つの論点がありますが、これを参考にしながら、それぞれ自由に御意見を述べていただければと思います。御発言の内容は事務局でまとめまして、皆様に後ほど確認して、そしてまとめる作業に入っていきますので、これまで同様、自由にお話をいただければよろしいと思いますので、よろしくをお願いします。

どうぞ、加藤さん。

加藤(百)委員： 加藤です。よろしくをお願いします。

昨年度も何度かこの会議で、当社の活動であるアグリアーツという農業を使った人材育成事業についてお話しさせていただきましたが、1年間活動してみているいろいろわかったことがありますし、菊川でどんなことが起こっているのかというのを皆様と共有できればと思っています。

一つは、小学6年生から中学2年生がいるのですけれども、自分たちが税金でもって勉強ができている立場であるというのを知らない子がほとんどでした。それは、私もすごくびっくりしたのですけれども、何となく勉強させられているという立場でしか自分たちの社会に対する立ち位置を認識していなくて、それはとてもよくないことだなと思いました。

何か恩着せがましく「大人たちが勉強させてやっているのだ」みたいな言い方は違うと思うのですけれども、子供たちも社会の一員として、どういう位置付けで、どうして義務教育を受けているのかというのはしっかり理解できると思いますので、それはこういういろいろな施策の中にも入れていかなければいけないと感じています。

もう一つが、我々は農業を使ったイノベーター人材みたいなものを創出するために活動しているのですが、その中で大事にしているのがセルフプロモーションです。恐らく、皆様のほうがプロフェッショナルなので、私から言うまでもないのかもしれないのですけれども、どうやって自分を社会に位置付けていくのかというのを、家庭でも学校でも意識させる機会が余りないと思います。

なので、自分の夢を堂々と語り、そこまでのプロセスをみんなに聞いてもらって、「じゃあこっちのほうがいいんじゃないか」、「あっちのほうがいいんじゃないか」とか、みんなにも意見を言ってもらいながら、目標に向かって一步一步進んでいくというセルフプロモーションを意識していくといいと思っていまして、そういう意味で、毎日会っている先生や家庭ではなかなかそういうことは言いづらいと思う

ので、こういう地域のプロフェッショナル人材とか、外部の人たちが時々入ってきて、そんな機会を子供たちに与えてあげると、恥ずかしいという意識を余り持たずに夢を語るができると思います。

最後の一つは、菊川東中学校の校長先生が非常に積極的な先生で、アグリアーツは学校の外での活動だったのですけれども、「中に入ってきていいよ」と、「ほかの中学校も呼んでいいので、一緒にやろうよ」と言ってくださって、毎週は無理ですけれども、月に2回ぐらい、中学校のパソコン教室の部屋を借りて、パソコンの使い方とか、あと経営の事業計画の立て方とか、そんなものを座学として、農業の作業がある土日ではなくて、平日の部活がない水曜日に実施しようということで動き始めていまして、校長先生によって、大分やれることが違うのだなと感じますので、校長先生たちの意識改革みたいなものも、もしかしたら必要なのかなと感じております。以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。  
マリさん、どうぞ。

マリ・クリスティーヌ委員： 今の話と少し関連するのですが、資料がよく理解できなかったのですが、外部の方々に100%入ってもらっていて、活用しなかったという方はほとんどなかったのですが、外部から人が来たほうがいいのか、それとも活用しないほうがいいのかがよくわからなくて。

外部の方々をたくさん活用しているとなると、本来学校にいる方では足りないという大変ですけれども、余り能力がないから外に頼まなければいけないみたいな見え方になってしまうのが余りよくない感じがするのですが、活用しなかった理由にも少し触れていただくと、わかりやすいかなという感じがしました。

もう一つ、よく職場見学とか、親が働いているところに子供たちが見学に行くのですが、職場見学というのはただ見に行くだけで、おうちへ帰ってくるとレポートを書くじゃないですか。私も子供たちにこういうふうにしたらとかと言うのですが、それが本当に子供たちにとってプラスになっているかどうか。

むしろ、今、話があった土曜日、日曜日に畑仕事を親と一緒に手伝ったりすることのほうが、職場見学よりよっぽど何か身に付いて、それがちゃんと役に立つことになるので、職場見学で何か作業ができたとか、何度か行って何かやっていることについて親しむというふうになればいいのですが、1回だけの見学会が数のうちに入ることで見ると、正しい情報を私たちも得られないので、次、どうすればいいかということも伝えられないような感じがしました。

矢野委員長： これは事務局から御説明をいただけるといいと思います。外部講師を招く学校の事情とか、地域の事情とか、必要性ですね。それがどうい

う経緯で実現しているのかについてお話をいただけますか。

それから、職場見学した後の子供たちの反応とか、あるいは教育効果とか、そういったものがわかれば数字がなくてもいいので、事務局からお話してください。

はい、どうぞ。

教育委員会： 義務教育課長の宮崎と申します。よろしくお願いたします。

3月まで西伊豆町の教育長をしております、一番よくわかっているのは現地の話になるものですから、そちらのお話をさせていただきたいと思います。

学習指導要領等が改訂されて、新しい教育、例えばプログラミング教育とか英語教育などがどんどん入ってくるのですけれども、そういった中で地域の人材を活用してプログラミングのメンター、指導者を育成しましょうとか、学校が大変多様化しておりますので、学校の教員の研修で当然資質向上を図っているのですけれども、それだけではなく、社会総がかりということで、保護者、地域人材、例えば老人クラブ連合会、外国人講師、それからスポーツの専門家や太鼓のプロを招いたりして、特色ある学校づくりを特に推進しております。

地域によっても違うと思いますが、それぞれの学校がそれぞれの予算を使い、それぞれの専門家を招くことによって、より学校の中だけではできないものを実現していく、いろいろな刺激を与えるというのがそもそもでございます。

矢野委員長： それでよろしいですか。

マリ・クリスティーヌ委員： また話をお聞きしたいと思います。そういう現状なのですね。

矢野委員長： そうですね。

どうぞ、白井さん。

白井委員： 静岡大学の白井と申します。

今のことに関連してですが、私も子供の負担感だけが増すような多様性というのは本末転倒になってしまうと感じています。

例えば、子供にとっては、来週の月曜日までにアポイントを取らなきゃとか、職場に電話しなきゃとか、終わったらレポートを書かなきゃとか、本当にこなすようになってしまいうし、担任の先生も、プリントを配って来週までにこれをやりなさいみたいな形になってしまうので、そこで、学校の中に非常勤でもいいので専任のコーディネーターを置いていただきたいと思います。

担任の先生の負荷や主任の先生の負荷もありますし、日常的な学業の中でさらに課題が増えていくという形だと、どうしても子供にとっ



てこなすだけになって、その目的や意図、それこそ税金の使われ方など、いろいろなことがわからないままに進んでしまうので、例えば、授業として1年間これに取り組みますと。その目的の授業があったり、授業計画があったり、実際の取組があったり、お手紙の書き方とか、アポイントのとり方とか、いろいろな1年間の授業をしていただいて、それにはとても手間もかかりますので、学校の中に地域や人材とやりとりをするコーディネーターを非常勤でもいいので置いていただいて、子供とも関わっていただけると、すごく今やっていることがつながっていくと思いました。

地域のコーディネーターがいらっしゃるの存じているのですけれども、例えば、ほぼボランティアの元PTA会長さんだったりとか、なかなか負担をかけるのもお願いしづらい状況にあるのではないかと思いますので、そんな形でいい形にさせていただけたらと思います。

矢野委員長： どうぞ、竹原さん。

竹原委員： 今、キャリア教育をテーマに話されているのですけれども、全国的にキャリア教育をやっていない学校は今はほとんどないと言われていま

す。小学校から大学までキャリア教育があって、その中で特に中学2年生で職場体験とか職業講話を聞くというのが多いのですけれども、今、課題なのは、学びの深さや子供たちがどれだけきちんと参画してやっているかや、先生方が一回職業講話をやればよいというぐらいで終わらせているのかどうなのかという、その差がすごく激しくて、マリさんがおっしゃったように、実施している学校は100%であったとしても、そこにはいろいろな内容があると思うし、とても深くやっているところも、そうでないところも、それからそれをやるためにコーディネーターが動いているところとか、あとは今、全国的に文部科学省は地域連携担当教職員を法制化することを検討していますけれども、そういう位置付けのある人がいるかいないかというのでも大きな差が出てきます。

たまたまできたばかりなので御紹介しようと思って、今日、ミウラ折りという宇宙開発の折りで作ったマップを持ってきました。

まず、キャリア教育のことは、このマップの表のほうですね、地図ではないほうで、「まちのたから」を学びに活かす9年間というのがある、その下の右側のほうにキャリア教育のコーナーをつくっています。

小学3年生でやる「まち探検」もキャリア教育と位置付けて、中学生はこういうふうに学びますということで、詳しくお話しはしませんけれども、かつて藪田さんにも1年生のプロに学ぶキャリアの講師として、30人お呼びする中の一人として、水産業ということで来ていただ

いてよかったですけれども、体系立ててキャリア教育を地域でプランづくりしていかなければいけないということが一つと、それをコーディネートする人たちがとても必要であるということだと思えます。

そしてもう一つ、その上の表を見ていただきたいのですが、地域から学び、地域に出て学ぶということは今までどこにもありませんでしたが、それを社会に開かれた教育課程が始まる前に、どういう状況で、どのカリキュラムで関連付けられるかというのを、東山田中学校区の3小学校1中学校で現状把握することが、この上の表です。

まだまだすかすかなのですけれども、これを充実させていくことによって、学校では学べないこと、それから先生方の能力が何か足りないからという意味では全くなくて、地域の様々な宝とともに、人材であったり、歴史であったり、自然であったり、文化であったり、産業であったり、そういうことを一緒に学ぶことでよりよい教育ができる、社会総がかりでできるという視点で、このカリキュラムがこれから展開されるのが現状だということで、こういう表にしたのは多分余りないのです。全国で先駆けてやっています。

私は、教育課程部会の総則の委員をさせていただいているのですが、やはり全容が見えないというか、社会に開かれたと言いながらも、どうやっていくのだろうかということで、これが一つのヒントになればいいと思って、昨年一年間かけて作ったものです。

裏にあるのはマップですけれども、こういう状況はよく皆様の広報紙やイメージにもあると思います。地域にはたくさんの方が関わってくださっていますという。

ただ、たくさんの方が地域にいますとか、たくさん資源、工場もあります、何かもありますというだけでは、次のステップにはなかなか行けないので、そういう意味でこのマップではなくて、裏の表が新しい提案として作られたのです。

お聞きしていると、静岡にはうらやましいほどの産業があったり、自然があったり、海があったり、山があったりと、本当にうらやましい思いがあるのです。そういう全ての宝を総動員しながら、どういうふうこれからの子供の学びを深めていくとか、教科書に載っていることというのは過去の知識でしかないのです、やはり新しいこの後の社会をつくっていく担い手になるためには、子供たちがリアルな現場で学ぶことがすごく大事であると思っています。

ですから、今日の論点で、その実現をするためにはどのようにしたらいいでしょうということで、私の提案は、必ずカリキュラムとの関連付けをできる部分があるので、そこを丁寧に、別に無理をする必要はないのですけれども、もう実際にやっつけらっしゃるものだと思いますから、関連付けていくとか、合わせていくとか、考えていくということが一つ。

それから、先ほどから出ているコーディネート機能を充実させると

ということで、そのためには学校支援地域本部事業やコミュニティ・スクールということがすごく大事です。もう既に様々なところで動いていらっしゃるのですけれども、何かをやるときに審議をしてビジョンを立てるとというのがコミュニティ・スクールの審議の真髄なのです。

コーディネーターだけが頑張っているいろいろなやっても、審議してビジョンを立てると両方がなければ、方向性がずれたり、地域だけが頑張ってしまったということもあり得るので、コーディネート機能とともにコミュニティ・スクールという制度を両輪のように動かすということがもっとも必要になってくると思います。

地域と学校の連携というのは、今までは見守り活動とか、ちょっとしたイベントだとか、そういうことだけでやってきたのですが、教育課程が新しくなるということで本丸に来たと言われているので、今この議論をすることはすごく大事なことだと思います。

矢野委員長： ありがとうございます。

同じ地域の幾つかの学校が集まって、言わば学校は違うけれども、小中一貫の教育プログラムをつくったということですね。

竹原委員： 中学校区でつくっています。

ここをよく見ていただくと、小学1年生に入った子供が中学3年生になると面接を受けるまでこの地域で大きくなるという、本当に小さな中学校区の一つのストーリーになっています。

ミウラ折りという宇宙開発の折りにしたのは、いい資料を作っても、みんな3月になると資料がたまっていくので、すぐに捨ててしまうのです。

でも、これは捨てないだろうということで、そのアイデアで少しお金をかけたことと、それから新人の教職員やここに赴任していらした先生が地域をぱっと見て、これからの学びをつくっていけるようにというのが第1の目標で、それからコーディネーターがうまくできるようにということで作りました。

矢野委員長： どうもありがとうございます。大変参考になる資料だと思います。それでは、若い人から先にどうぞ。

藪田委員： 日光水産の藪田です。

私は漁業と水産業の観点から話をさせていただきますけれども、まず、先ほどの竹原委員の資料にあるように、東山田中学校では1年生のときにプロに学ぶということで、子供たちが興味を持ってどんな仕事があるかというのを勉強して、2年目に体験をするというカリキュラムになっていると思いますが、漁業・水産業の現場といいますと、比較の見学しやすい養殖や定置網のような漁業に関しては、見学、体験で

きることがあるのですけれども、実際の漁業の現場は漁船漁業で、船に乗って体験するのが一番の体験になると思うのですけれども、船の定員や危険度、また教えられる人間が船にいないということで、なかなか教育ができないのが現状です。

そんな中で、静岡県には漁業高等学園という素晴らしい独自性のある学園がありますので、こういった学園を広く県内の小・中学校などにキャリア教育の場として開放していただいて、例えば山間部でも、海に憧れを持って漁業をやってみたい、興味があるという子どもたくさんいますし、我々の会社にも求人が来たりしています。ただ、我々は遠洋漁業で、2カ月も帰ってこられない漁に素人を出すわけにはいきませんので、漁業高等学園を勧めています。

キャリア教育と言うと何となく地域に根差した、地域にある施設しか体験できないイメージがあるのですけれども、興味がある子には、そういった場を県として提供していただければと思います。以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。  
それでは、渡部さんどうぞ。

渡部委員： 渡部です。

キャリア教育や職業体験を受けた側の者としての意見なのですけれども、この資料をいただいてから、友人や妹や弟たちに聞いてみたのですけれども、外部人材の活用は100%で、多分これにはキャリア教育なども含まれているのにもかかわらず、ほぼみんな覚えていなかったのです。

職業体験に行った場所も覚えていなければ、もちろん感想なども出てこないわけで、そういえば何かじゃんけんで最後に決めたなみたいな、そこだけ覚えている弟もいました。

なので、先ほど白井先生がおっしゃっていたように、子供たちも毎日いろいろなものの提出で忙しい中で、単発で特別な人を連れてきて、意味がないわけではないものの、高校、大学、キャリアを考える中に全然浸透していないのではないかとということに、周りに聞いてみて私も初めて気が付きました。

なので、この2ページに書いてあります「実施した」というのが、何回ぐらいでどのぐらいの期間かもう少し表れてきたら、そこで企画などができるのではないかと感じました。

そして、振り返ってみると、親と先生以外の大人に触れる機会が余りにも少ないと改めて感じました。つまり地域での面白さを発掘する時間が全然ありませんでした。

日常で地域と触れ合う機会がないと、誰かすごい人が来て話を聞いてもぴんどこないところがあって、学校外での子供たちの時間をつくることを、私は提案の一つとして持ってきました。

でも、学生さんもどうしても部活で忙しいところがあると思うので、部活を考えたときに、例えばスポーツが好きな子がバスケットボール部やサッカー部や強い部活に入っていくのはいいのですけれども、どうしても部活に足が向かなかつたり、スポーツが苦手だったりする子供たちが、ボランティア部やサイエンス研究部という何をやっているかよくわからないような部活に最終的に集結します。学校になかなか来られなかつたりする子たちも、そこにいたりします。

私の妹はサイエンス研究部だったのですけれども、やっていたことはウサギの世話だったので、結局何でも部みたいなどころがあり、でもそういった子たちが、文武両道といって優秀な偏差値をおさめていた子たちよりも、今回の課題である農林水産業、工業、商業に就いている。地元に戻ってきて暮らしているのは、そういった層なので、それを考えると学外の時間を部活と一緒に合わせていく。

例えば、ボランティア部のような部活が、先ほどの漁業というところで地元の漁協と組む。

富士市のNPOと吉原商業高校（現：富士市立高校）が組んで吉商本舗というお店を開設し、商店街の活性化のためにプロダクトの生産や企画からやっているのですが、顧問に地域の人になっていくという、そういうことができたなら、単発ではない長期的な、かつ偏差値が高い子供たちではない子たちも、自分が主役になってできる場所が出てくると思います。

なので、そこが農林水産業、工業、商業の担い手に、楽しさや地域とのつながりを見出しながら、将来仕事にしていくところとつながれば、意味のある学外外部人材との交流になるのではないかと思います。

矢野委員長： ありがとうございます。何か気付かない大事な点を指摘されたような気がします、そういうことをやっている学校があるかもしれませんので、その辺がわかれば、事務局で調べていただいて、また御報告をいただければと思います。

渡部委員： 先ほどの掛川学という部分です。こういったほかと組んでやっている例が幾つかあることがわかったので、全ての学校で導入できて、各学校がその地域にある産業や商店街と組んで、その学校の特色になっていったら面白いと思います。

矢野委員長： ありがとうございます。  
それでは、藤田さんどうぞ。

藤田委員： なすびの専務の藤田と申します。

3年目ということで、あつという間の3年目ですけれども、最初にこれに参加をさせていただいたときは、自分が意見をさせていただ

でも、成果が出るのは当分先のことなのかなと思っていたのですけれども、3年目を迎えてみて、今言ったこと、若しくは今やったことが間違いなく将来を動かしていくと思いますので、改めてこの会を大事にしながら意見をさせていただきたいと思っております。

と言いますのも、企業人として考えた場合に、静岡県が今一番大きな問題を抱えている部分の一つとして、人口流出の問題、戻ってきにくいということがある中で、やはり教育が私は全てだと思います。

今、この職場体験やキャリア教育をやっている中で、実施した学校の数ややったことは報告があるのですけれども、じゃあそれがどう生きて、実際にそれがUターンにつながっているのかという検証がなされていないと思います。

なので、教育をすること、若しくは子供たちに機会を与えることが最終的な目的になってしまっていて、この教育をしたから、静岡を愛してくれて、静岡に戻ってきてくれて、この静岡が盛り上がっていくのだというところがゴールだと思います。

そう考えた場合に、実施したことよりも、先ほどおっしゃっていましたがけれども、ほとんど覚えていなかったというような職場体験であれば全く意味がなくて、本当にここに戻ってきたいんだということを目的にしたキャリア教育等をしていかなければ、子供たちにただ与えるだけ、時間を無駄に使うだけで何も残らないものになってしまうと思います。

ですので、仮に静岡県を経営するとするのであれば、人材の獲得というものはとても大事になってくると思いますし、それがなければこれからの地域間競争に負けてしまう。竹原さんが、こんなに素晴らしいものを横で作っているのに静岡はどんどん負けていってしまって、是非こういうものも活用して、静岡県で育った子供たちが静岡県に戻ってくるということを目的にやられたほうがいいと思います。

その中の一つで、うちのお店で草薙に「茄兵衛」というお店があります。その店長は今28歳なのですけれども、中学校のときに私の兄の当社の社長の話をキャリア教育の中で聞いて、この会社は面白そうということを知っていて、神奈川大学に行って戻ってきて、当社の就職試験を受けてくれて、「志望動機は」と聞いたら、「中学校のときに社長のお話を聞いて、この会社に入りたいと思った」と。これが多分、理想とするサイクルだと思います。ですので、教育をすることが目的ではなく、静岡を盛り上げることを目的に教育をしていくということが私は大事だと思っております。以上でございます。

矢野委員長： ありがとうございます。  
池上先生、どうぞ。

池上副委員長： 池上です。今日の皆さんの熱い語りを聞いて、私も一言。

まず竹原さんが紹介された、こんなに素晴らしいものを私たちは今日共有できたことをとてもうれしく思います。考え付きそうでいて考え付かなかったと思います。つまり、キャリア教育の全体像を空間と時間で「見える化」するということですね。一言で言えば簡単なのですが、確かに今まで誰もやっていなかった。

こういうツールを目の当たりにして考えたことを3点お話ししたいと思うんですけども、1点目は、これを学校の中だけで使うのではなくて、是非地域のいろいろな方々にも、このツールを使ってキャリア教育への協力を呼びかけていきたいということです。

恐らくやっていらっしゃると思いますが、例えば自治会の連合会であるとか、それこそ商工会議所も含めて、いろいろな職業の結び付きの方々にこれを配って、「実は今、この地域ではこんなキャリア教育の全体像を考えているんですよ」、「皆さんの協力を是非お願いします」と言うと、地域の方々も何のために学校に行くのかということがより明確になると思います。「今日お話をするのは中学校2年生だけけれども、この子たちはこういう時間と空間の流れの中であなたのお話を聞くのです」というふうに位置付ければ、しゃべるほうも非常に明確な問題意識を持って話をしていくと思います。そういう全体像の共有を図り、受ける側、学校、そしてこのお話を提供する側で共有していく枠組みをつくるのがすごく有効な効果につながっていくと感じました。それが1点目。

それから2点目ですが、単発でやっても意味はないという意見をたくさんの方がお話しされていて、私も全く同感です。昨年度までに何度も紹介した本学の実践演習という科目は、ある個別の具体的な地域での活動を半年ないし1年行います。1週間ごとに地域に行ったりするのです。繰り返しその地域と関わることで、その地域の全体像みたいなものが学生なりに見えてくるのです。したがって、一回その職場に行って終わりではなくて、少し間を置いて2回目に行くとか、そうする中で振り返りとか自分なりの工夫ができるので、10回行けとは言わないけれども、2回、3回行ってみるという仕立ては、学習を深化させる意味で有意義なのではないかと思いました。

それから3点目は、その経験を共有する仕組みをつくるということです。実は、実践演習も、個々の学生は活動を終えて報告のレポートを書くのですが、それで終わりではありません。最後の事後指導授業というときに、教員が実践演習という授業はどういう意味があったかという概観的な話をするのですが、その後パート2で、ランダムに組んだ5、6人のグループで、自分はどのような活動をしたのか、そこにどのような学びがあったのかというのを知らない学生とシェアします。そうやって言語化することによって自分の学びを他者に伝えて、そのことによって自分の学びの意味を改めて見出すというプロセスを経ています。

なので、子供たちも作文を書いて終わりではなくて、その作文をもとにしながら友達とその経験を共有する。ほかのところに行った子供の話の聞き、自分の経験を話すことで、自分の経験の意味をより深く定着させることになるのではないかと思います。2点目と3点目は、既存の枠組みの仕立てを少し変えればできることだと思いますので、是非トライしてみるといいのではないかと思います。以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。  
加藤さん、どうぞ。

加藤（暁）委員： 私は、今までにない視点を一つ発言させていただきたいと思います。国際化という視点です。

半年ぐらい前だったと思いますが、タイの元農業大臣を連れて、掛川にある平野さんのキウイフルーツカントリーというところにお邪魔したのですけれども、とにかくそこに行ってみてびっくりしたのは、海外からの見学者がとても多いのです。それも近いアジアのみならず中東だとかヨーロッパとか、中には1年ぐらいいる人もいて、とにかく国際化しているのです。平野さんがアメリカで農業を勉強されたということもあって、英語もできるということもあると思うのですけれども。

彼の引率で、掛川のみならず袋井だとか様々な地域の農家も回って、例えばユニバーサル農業といって知的障害者の方々を受け入れている農園に行ったり、ハウス栽培しているところに行ったり、カット野菜を作って産業化しているところだとか、様々なところをタイの人たち20人ぐらいをお連れして目からうろこだったのですけれども、東京に住んでいる人間としては、すごくうらやましいというか、多分これは一つの事例だと思うのですけれども、目の前にそういうところがたくさんあるのだなと感じました。

実は私、サマースクールを福岡でやっている本業の次世代育成リーダー塾以外に、最近、公益財団法人AFS日本協会という高校生の交換留学の老舗団体の理事長を拝命しまして、発展途上国のアジアだとか、中南米だとか、そういう国々の私と同じような理事長職の人たちとの会議が年に何回かあるのですが、そこで単に普通科の高校生のみならず、農業高校とか、工業高校とか、そういういわゆるキャリアを追求している高校生たちを是非日本で1年間、1年間は難しかったら短期でもいいから受け入れて欲しいという要望がかなりあります。

ただ、全くまだ実施していない状況でありまして、静岡の高校の中に、同じ夢を持っている海外、とりわけ発展途上国の子と一緒に学んで、そして近くの平野さんみたいなところやいろいろなところに、キャリア教育というと何か少し構えてしまう感じがありますが、そうではなくて、放課後に毎日でも行って何かお手伝いするとか、何かそう



いうことができるようになる」とインパクトがすごくあるのではないかなど、私自身が静岡で見学させていただいて思いました。

そういう意味で、皆様に本当に申し上げたいのは、静岡県は本当に恵まれていて、こんなに高校生が発揮しているというのを強みにして、どんどん先を目指してやっていただく。素地はできているわけですから、いかにそれを埋め込んでいくかというときに、外からの知恵を入れるというか、国際的な若者たちと一緒に学ぶ。

私もサマースクールをやっている、今年14回目で、静岡の子たちにも毎年10人いらしていただいているのですけれども、11回目からアジアの子たち20人を無償で招待して、一緒に学んで、一緒に2週間寝泊まりしながら語り合うということをやったのです。そうしたら、例えば中国とか韓国の子たちが歴史の教科書を持ってきて、うちの国はこんなふうに日本のひどいことを書いているよとか、2段ベッドで教科書を開きながら、日本の子たちは日本の子たちで教科書を開きながらいろいろやるわけですよ。ここには国の対立では考えられないような交流が生まれているのです。

そういうことによって、私はアジアの日本語を勉強したい子たちを入れて、日本に対する興味を持ってもらいたいという思いが一番あったのですけれども、この4年間ぐらい体験して、むしろ日本人の子たちへの影響力のほうが大きいと思いますので、それが日常で静岡の中に生まれると、またさらに深みを増すのかなと思いました。以上です。

矢野委員長： 大変貴重な体験を含めて、ありがとうございました。  
片野さん、何かありますか。

片野委員： 東部で酪農をやっております片野と申します。よろしく申し上げます。  
先ほど渡部委員から、職業体験をやったけれども、大人になってみて何をやったか覚えていないというような発言がありましたけれども、私自身、酪農をやっております、小学生を中心に職業体験をやっております。

そういう子供たちが大人になって「何をやったかな」という話になると聞いたら本当にショックで、子供たちに教えるというのは僕たちの中でも大事なことだと思っていて、時間を割いて僕たちも牛に触らせたりとか、餌寄せをしたりとか、一緒に哺乳したり、また乳搾りも教えたりとか一生懸命やってきたつもりなのですが、それが余り記憶の中に残らないというのであれば、本当にこれやる意味はないのではないかなと思ってしまうぐらいです。

けれども、この職業体験を良くしていくにはどうしたらいいのかと今考えていたのですけれども、まず、子供たちが好きなところに行く。

応募を募って、食品関係やスーパーに体験に行きたい子供は、この

班、この班という形で行くと思いますが、ただ単純に区割りをして行くのではなくて、その前段として、その産業がこの世界に対してどう貢献しているのかとか、もし仮に日本に酪農がなくなってしまうたら自分たちの生活がどうなるのかとか、そういうところから学びを始めていくことが大事だと思います。

今まで来ている子供たちは、散発的に先生に連れられて来て、実習をして時間になったら帰るということで、僕たち自身は結構いろいろ教えた感じになっていたのですけれども、それが特に印象に残っていないかもしれないのであれば、そういうところをちゃんと教育委員会から小学校や中学校に通達して、いかにして職業体験を無駄なくやってもらえるか、また将来にわたって何かの役に立つようにできるかということを中心として、形式的にこの時期になったからやりましょうではなくて、目的意識を持たせるためにはどうしたらいいのか、また将来にわたってそれが役に立つようにするにはどうしたらいいのかということで、逆にそういうことを事前に話をしてきて、それを僕などにお話ししてくれるとすごくありがたいと思います。

もし酪農家がいなかったら、じゃあ学乳がなくなりますねとか、そういうところからいろいろな話が広がってくると思いますので、そういうことをしていけばいいと思います。

また、ちょっと余談ですけれども、この竹原さんのミウラ折りのロードマップ、すごく素晴らしいなあと思ひまして、実はこれ、小学生、中学生の子供たちだけじゃなくて、我々大人でもこれは使えるんじゃないのかなとも思うんですよ。自分が40になったときにどうなっているのかというのをここに書き記しておいて、目標としてこれを眺めるというのもまた面白いのかなとも。これは余談なんですけれども。本当に子供から大人まで使える、そういうふうなものなのかなというふうにちょっと今すごく素晴らしいと思っております。

また、少し話がそれてしまうかもしれませんが、専門職大学基本構想策定委員会の委員にさせていただきまして、5月1日に出てきたのですけれども、2018年から専門職大学の設置が認可されるという中で、去年の5月ぐらいに私が新聞の切り抜きを持ってきまして、そういうのができますよということをお話ししたような記憶があります。それが本当にこの1年で、多分僕が言ったからではないとは思っていますけれども、やりますと。静岡県が唯一手を挙げた県であると聞いて、本当に誇らしいなど。静岡は素晴らしい、全国に先駆けて、率先してやれる県なのだと思って、委員にお声が掛かったときに、是非やらせてくださいとお願いした次第です。

そういう中でも今悩みがありまして、今まで県の職員の方々が中心になって農林大学校の先生をやられていると。それだけでは少し足りないという中で、外部からプロフェッショナルの方を入れて、そして大学をつくっていかなければならないと言うのですけれども、どうし

たらそういう人材に来ていただけるのかなどをこれから議論していかなければならないというのもあって、やはり今、学校の中で先生だけでは賄い切れないと。

マリ委員の言ったとおり、本当に賄えていないのではないかとこのころで、どうやって人材を確保していくかを本当に論点にしていかなければなりません。

私自身も、今まで受動的に先生方をお願いされて職業体験などを受け入れてきましたけれども、産業界の第一線で頑張っている人間がどうやって教育の中に関わっていくのかを本当に考えていかないと、子供たちが農業に関心がなくなってしまうと思います。

自分たちも後継者というか自分の片腕になるような人材を確保していくためには、自分から動かなければ、全くそこに望めるものはないということがこの委員を通じてわかってきたので、私が言えることは農業だけに関してなんですけれども、農林水産業でプロとして活躍されている方はいっぱいいますし、そういう人たちの教えを請おうと思えばいつでも請えるというか、ちゃんとした順番を踏んでいただければ、こちらとしては準備があると考えておりますので、是非とも農業に関してはもっとカリキュラムの中に入れていただきたいと思います。

最後に言おうと思って言い忘れたことが一つあるのですけれども、林業のことに関して少しいいでしょうか。

第1回の専門職大学基本構想策定委員会の中で林業家の方といろいろ話をしていたのですけれども、今、木を切れる人が本当にいなくなっている中で、私も田舎に住んでいるのですけれども、農道がどんどん圧迫感を感じるようになってきて、何でかなと思っていると、木がだんだんせり出してきて、すごく重たい感じになっているのです。

20年、30年前はそんな感じではなかったのですけれども、木を切る人がいなくなってしまう中で、これは質問なんですけれども、カリキュラムの中に、防災でも技術でもいいのですけれども、木を切ることを教育の現場で教えているのかどうか、誰かわかる方がいれば教えていただきたいのですけれども。

矢野委員長： 今、わかりますか。森林の伐採ですね。  
それでは、次回にでもお話ししていただければ。

片野委員： それでは、この話はまた次回に持ち越しで。

マリ・クリスティーヌ委員： 静岡県はわかりませんが、私は愛知県の海上の森という森の名誉センター長をやっています、そこに340ヘクタールの森があるのです。愛知万博がそこにできるはずだったのが環境問題でできなくて、別のところへ行ったのですけれども、そこに海上の森大学というのがありまして、今、森女を育てています。

女の子で、チェーンソーを使いたい女の子がたくさん愛知県にいます。しゅっちゅう来て、そこで研修してもらって、もちろん先生は男性の方なのですけれども、女の子たちがチェーンソーでちゃんと木を切れるように、またどういう角度でたたいていけば、どういうふうにも木が落ちていくかということも含めて教えていますので、是非一回お出かけになって、森女たちと交流していただけると楽しいかと思いません。

矢野委員長： 私も先日、磐田農業高校と、農林大学校と、農林技術研究所を1日かけて見てきまして、皆よくやっていますよ。楽しみです。一遍見てきたばかりなので、余り偉そうなことは言えませんが、随分力を入れていると好印象を持ちました。専門職大学にしようという構想が生まれたものがあるわけですから、大事にしたいと思います。

またそちらの委員会のほうも、片野さん、頑張ってください。

それでは、杉さんお願いします。

杉委員： 論点について申し上げますと、私は経済界におりますので、どういうことを教えられる人が欲しいかを、教育委員会で各学校にアンケートを取るなどしてもらえるとありがたい。静岡県では経済4団体が連携を組んでおりますので、必ず出せるかどうかはわかりませんが、こういう人がいますよ、このぐらいの時間だったら学校に派遣できますよ、そのようなことができると思います。

実際に行っているものでは、キャリア教育、要するに働くことの意義などを社長さんたちに話してもらって講話を、高等学校からオーダーを取って実施しています。

ただ、先ほどの資料にもありましたけれども、各学校でそれぞれ工夫してやっておりますので、教育委員会が声を掛けてもオーダーは10校も出てこない状態ですが、それはそれで別の形でやってくれていけばよいと思います。

少し論点は外れますが、何をあのときにやったかわからないという渡部さんの先ほどの意見、あの話は多くの人にとってもそうだと思います。

何でそんなことが起こるかということ、なぜ学ぶのかということ、教師も生徒もベクトルをはっきりさせないまま行っているからだと思うのです。

偏差値をより高くさせる、より有名な大学、有名な企業へ就職して自分が幸せになる、より豊かな生活をする、多分ここにベクトルが向いていると思うのです。マリさんが学校に外の人を入れなさいいけないのですかと言っていました、偏差値を上げるためだけだったら要らないのです。

ところが、何で勉強するかということ、それは社会で必要になる人を

育てるためなのです。特に我々静岡県からすれば、静岡県の役に立つ人を育てたい。

社会で必要な人になるのだという、この認識を、教育委員会が中心になるのでしょうかけれども、学校と、生徒と、みんなで共有して歩むということをやらないといけないと思います。

少し余談になりますが、そろばんというのがあります。

うちは日本珠算連盟静岡県連合会の事務局を受託しています。足し算、引き算、掛け算、割り算なら電卓があるじゃないか、そろばんは要らないという声があるのですが、実はその延長上に暗算というものがあるのです。暗算ができるようになると、わずか3秒ほどで3桁15個の数字を足せてしまう。それは達人たちの話ですけれども、こんなところへ行くのです。

もっと簡単な暗算でもできるようになると、仕事の中で、ここは工業、農業、商業などの分野の話になっていますが、全てのところに数字に対する強さが生きてきますので、大事だと思います。

今、小学校でそろばんの授業をやっているのは、小学校3年で3時間、小学校4年で2時間だそうです。

ところが、小学校にそろばんをできる先生が必ずしもいるわけではないので、静岡県では、静岡と伊東、そして磐田ではオーダーをいただいて、塾の先生たちが応援に行っています。これを県下全部でやるとよろしいのではないかと思います。ただ足し算、引き算など、演算のできる子をつくるのではなくて、その延長上の暗算ができるところへの入口を見せてあげるとよいと思います。

それから、何度かお話に出てきていますけれども、静岡県にいる人が静岡にいる幸せを知らない、隣の県の竹原さんが、静岡県はこんなに幸せだとおっしゃっていました。

私は、前に秋田県の人に「あなたたちは静岡県に住む幸せをわかっているのか」となぜか怒られたことがあります。そのぐらい静岡県は素晴らしいのですが、静岡に住んでいる人がこの良さを知らない。

地域学では、後ろに座っておられる渋谷さんが書いておられますけれども、幼稚園や小学校のときから徹底して、静岡県は幸せなところだということを教えることが大事です。それで、その静岡県でより元気に働こう、役に立ってみようということをちゃんと論理立てて教えていくと、今日の論点のところの、こんなプロフェッショナルな人に役立つてもらおうというところへ流れてくると思います。よろしく願います。

矢野委員長： ありがとうございます。

これからも経済界とはよく連携を取りながらやっていきたいと思えますので、遠慮のない御意見を賜りたいと思います。

それでは、今日まだ御発言のない宮城さん、いかがですか。

宮 城 委 員：　　すごく小さなことですが、思ったことを二つ申し上げます。

一つは、先ほど片野さんもおっしゃっていた職場体験です。

SPACにも、劇場でするので職場体験に来てくれる子がいて、劇場での職場体験というのは、相当独特な職場体験なので、忘れてしまうことはないと思うのですが、しかし劇場というのは仕事の質が非常に波のある場所なのです。

つまり、物すごく忙しいときと、その後、みんながまとめて休暇を取るときと、すごく波があるところなのです。

学校のほうは、SPACの状況を何も事前にはリサーチせずに、突然、「この日に職場体験何人行きます」みたいな感じになるわけです。たまたまお客さんがたくさん来て、案内や何かをするような、そういう局面で体験できる子もいれば、みんなが休暇を取っているようなときになってしまう場合もあって、ですからもう少し職場体験の学校と受け入れ側が多少相談をした上で時期などを決められるといいと思います。多分、片野さんがおっしゃっていたことと関係があると思います。事前に受け入れる側と学校で少し相談ができるといいと思います。

もう一つ、先ほどパワーポイントでいろいろ見せていただきましたけれども、本県高校生の活躍で、こんなに活躍しているとはすごいなと思ったのですけれども、僕は演劇でたまたま、この伊東高校の演劇部が活躍しているということは知っていたのですが、しかし、これを僕らが知ったのは、かなり回り道をして知ったのです。

というのは、この年の高校演劇部の全国大会が広島県で開かれて、SPACで働いているテクニカルスタッフの一人がたまたま広島出身で、実家に帰ったときに演劇部の全国大会をやっていたから見に行ってみたら何と伊東高校が出ていたと言って、SPAC全体の会議のときに報告があって、こんなに素晴らしいことをやっていたという。

その後、僕もインターネットで一生懸命調べて、こんなに面白いことをやっているのだと知ったのですが、つまり、事ほど左様に余り広報されていないと思うのです。こんなに活躍しているのに、恐らく高校生同士でも余り知らないのではないのでしょうか。

これをもっとうまくアピールできれば、高校生の中で張り合いも出てくるし、またこういうことでこんなに注目されるという目標にもなります。

同業者と言うと変ですけども、演劇の中ですら僕がわざわざインターネットで調べてだんだんわかってくるぐらいですから、もう少しアピールの仕組みを作っておくと、高校生同士ばかりではなくて、親のほうも、自分たちの地元でこんなにすごい子たちがいるのだということを知って、まさに静岡は格好いいなと親も思うようになるのではないかと思います。細かいことですが。

矢野委員長： 高校生の活躍ぶりの一覧表もすごかったのですけれども、今日配られています、世界クラスの資源と人材が、こんなにたくさんある県はほかにないです。誇りに思える県だと、私はつくづく思います。

実は、もう一つ議題がございまして、次の御担当の方が待ちかねておりますので、今日の議論はここで一度打ち切りまして、また次回もやりますから、そこでまた今回の分にプラスして、いろいろお話しただきたいと思っております。

私から一言だけ付け加えておきたいのですが、実学という形で授業から離れて、どこかの会社や現場を見に行くと、それもすごく大事な経験だと思いますけれども、例えば、先ほどの説明にありました理科の実験ですが、これは物すごく刺激的なのです。試験管に入れた薬が、ほかの薬と混ぜるとぱっと色が変わるのを見て、「これをずっと勉強してみたい」という刺激を受けることがあります。

そういう興味を持つ子は、全部ではないでしょうけれども、例えばそういう子が化学の工場を見に行ったら、「これはすごい」ということになるわけですから、私は教室でいろいろやること、カリキュラムの中で座学だけではなくて、しっかりと実験とか体験ということを教えることが、本当に学びのもとになっていると思っておりますので、静岡県の実験の時間はかなり長いので安心しましたけれども、その中身が刺激的な中身であるかどうか、安全ばかりを考えて何か引っ込み思案になってはいないかという懸念ですが、これは次回のお話にさせていただきます。

それでは、産業人材・確保育成プランについて、経済産業部から御説明をお願いします。

それではどうぞ、お待たせしました。

経済産業部： 経済産業部で産業人材確保担当の理事をしております尾上と申します。

私からは、産業人材・確保育成プランの内容と今回の事業の論点について説明いたします。

まず、次第があります資料の一番後ろのページになりますが、資料5を御覧ください。

経済産業部では、本年8月を目途に、以下の4点を基本方向とした産業人材確保・育成プランを取りまとめることとしております。

なお、四つ目の柱につきましては、お送りした資料では調整中としておりましたが、『郷土を担う子供の「生きる道」としての仕事を学ぶ環境づくり』といたしました。

このプランの概要につきまして御説明いたします。

大変申し訳ございませんが、参考資料2の1ページを御覧ください。

左上の趣旨・目的にありますように、労働力人口の減少により多くの産業で人材の確保は喫緊の課題となっており、また社会状況の変化により高度な人材の育成が求められております。今後は、AIやロボ

ットの導入による産業構造や就業形態等の変化が進むとともに、仕事と暮らしの調和がより一層求められていきます。

加えて、若者の豊かな職業人生と経済の持続的な成長を実現するため、平成29年度から33年度までの5年間の計画期間とする産業人材・確保育成プランを作成することといたしました。

プランの基本理念といたしましては、県内の産業やそれぞれの企業が魅力を持ち、働く人が働きがいを感じるものとするため、「第3基本理念」にございますように、『「働いてよし」「住んでよし」の環境づくりを進め、ジャパニーズ・ドリームを実感できる働き方を実現』、『企業と労働者、男性と女性、働くことに関わる全ての人々が積極的に課題解決に取り組むことを支援』、この二つを考えております。

さらに、基本方向として(1)にありますように、四つの柱を考えております。

続きまして、2ページを御覧ください。

本年3月に職業能力開発の観点で取りまとめた、第10次静岡県職業能力開発計画の概要でございます。

なお、この計画の策定に当たっては、本委員会の矢野委員長に検討委員会の委員長を務めていただきました。矢野委員長、ありがとうございました。

この計画で特に考慮した視点は、現場主義に徹した人材育成、女性や障害がある人など多様な人材が能力を発揮できる環境づくり、再チャレンジするための職業能力の開発の機会の提供、教育現場との連携です。この計画の内容につきましても、産業人材・確保育成プランに盛り込んでまいります。

申し訳ございませんが、資料5にお戻りください。

プランの四つの基本方向のうち、『4 郷土を担う子供の「生きる道」としての仕事を学ぶ環境づくり』につきましましては、人づくりや学校教育に大きく関わる部分でございますので、本日お集まりの委員の皆様から御意見や御提言を伺い、それを踏まえて本プランの策定を進めてまいります。

また、『社会総がかりで行う「技芸を磨く実学」の奨励』に関する論点につきましましては、先ほど御意見を伺ったところでございますので、経済産業部といたしまして以下の論点について御意見を伺います。

下のほうに四角で囲んでおります『論点 「生きる道」としての仕事を学ぶ環境づくり』でございます。

次代を担う子供たちには、地域の産業に携わり、地域の発展と活性化に大きな役割を担ってほしいと考えております。そのためには、社会各層で人づくりに取り組み、学校教育をはじめ社会全体で郷土を愛する心を育てていくことが大切であり、加えて、地域を支える仕事の力と職業倫理について理解を共有する必要があると考えます。

少し付け加えますと、子供たちが将来職業に就くことが、プロとし



ての職業倫理を持ち、社会に対して責務を果たすだけでなく、社会に貢献することを目指す「生きる道」を究めると言うことができます。

「武士道」「商人道」などと言われるように、富士山のような高い志を持ち、「生きる道」としての仕事を究めることの大切さを子供たちにどのように伝えていくか、この点について皆様に御意見を伺いたいと思っております。

以上で私からの説明は終わります。御議論をよろしく願います。

矢野委員長： ありがとうございます。

では質問、あるいは御意見があれば承ります。

学校教育と社会人教育、その接点、小さいときは働いていないわけですが、倫理観というのは職業倫理などにずっとつながってまいりますので、それを教育の場でどうやって生かしていただけるかということでもあると思います。

それでは、順番に願います。

加藤（百）委員： 前の議論も、今回の議論も、一つ大きく抜けているなと思う点だけ指摘させていただきます。

お金との付き合い方が一切出てこないです。オブラートに包まれたディズニーランドみたいな学校教育で、社会に出たときのお金に対する考え方が教育されていないので、非常に大きい谷を経験して社会になじんでいくのかなと思ひまして、シームレスにつなげたいということであれば、お金との付き合い方、お金もそうですし、価値ですね。お金に換えられない価値もいっぱいあると思いますので、価値の交換、今だとシェアですね、そういったものをどうやってプログラムしていくかを視点として盛り込まないとやっていけなくなるのではないかと危機感を持っています。以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。それではマリさん、どうぞ。

マリ・クリスティーヌ委員： ちょっと質問でもあるのですが、このプランはとてもいいプランだと思います。非常に網羅しています。ただ、いろいろな文言に対して少し違和感があるのです。

例えば、「ジャパニーズ・ドリーム」というのは、静岡県が「ジャパニーズ・ドリーム」をつくるのではなく、静岡県のドリームがすごく大事だと思うのです。

もう一つ、「武士道」という言葉を私もすごく好きで、本も大好きですが、ここに「武士道」という言葉を入れるべきかどうかということの一つ考えます。なぜかというと、非常に論理的なところから哲学的なところまでいってしまっていて、随分、職業倫理とかそういうこ

とも言いますけれども、結局、今までの大きな社会の問題の中には、非常に頭のいい子供たちがたくさん育ってきて、育ってきたゆえ、むしろ倫理観がない子供たちもたくさん育ったということだと思っております。

職業倫理となると、職業というものはシビアなもので、本当に切るか切られるかではないですけれども、そういう非常にシビアなところで、これから日本はもっともっとコンペティティブな世界の中で、こういう倫理感を職業倫理という一つのくくりで育てるのではなく、むしろ本当に基本教育の中で、人に対する思いやりとか、ヒューマニズムとか、それこそ矢野さんがやっていたらっしゃる論語というのが、学校教育の小さな頃から、すごく大事なことなのです。

大人になって、大きな会社の中にいたり、また大きな決断をしないとイケなかったりしたときに、そういうものがふっと浮かび上がって、「これがちゃんとやっていいことなのか」、「やってはいけないことなのか」が込み上げてくるものであって、こちらが項目にする必要があるのかなというところが少しだけ気になりました。

矢野委員長： 尾上さん。今の質問で「ジャパニーズ・ドリーム」について、少し説明していただけますか。天野さんどうぞ。

経済産業部： 経済産業部部長代理の天野でございます。着座して失礼いたします。

「ジャパニーズ・ドリーム」というのは、本県、知事が目指す静岡県のあるべき姿でございます。今まで「アメリカン・ドリーム」とか「チャイニーズ・ドリーム」などという言葉がございましたけれども、そうではなくて、この地域に暮らす人たちが、多様な生き方をそれぞれ尊重して、自分が自己実現し、いろいろな人たちが自分の夢をこの地域で実現できる社会や地域をつかっていこうという考え方でございまして、新しい静岡県が「ふじのくに」として世界にこれを発信して、世界から憧れられるようにづくりをしていこうという趣旨でございます。我々のペーパーの中にそういう言葉を少し丁寧に記載すれば良かったかなと思っておりますけれども、そのような意味でございまして、ふじのくに静岡県が目指すべき姿を表した表現でございます。

もう一点、「武士道」についてですけれども、「武士道」、「商人道」というのは、一つの例示でございまして、一つの「道」、「生きる道」というところに、実は職業人としてプロフェッショナルの意味が込められているのかなと。「道」を究める中で、お金儲け一辺倒ではないとか、あるいは武士階級、商人階級という身分の差がなく、それぞれの道を究めるということ、高い職業観と志を持って進んでいくことが非常に大事ではないかということで、先人のいろいろなそのような教えもございまして、それらを踏まえて、例示として触れさせていただきます。以上でございます。

マリ・クリスティーヌ委員： 今の話でとてもよくわかります。

私はせっかく知事がつくられた「ふじのくに」という素晴らしいタイトルがどこかにあって、ふじのくにのドリームがあることによって、それで武士道に入るのであれば、すごくわかりやすいと思うので、もし良かったら少しこの文言を付け足していただけると。

それこそ駿府城のある場所ですし、そういう点では歴史的につながるものがたくさんあるので、ストーリーのラインからすると、「ジャパニーズ・ドリーム」といきなり言われると、「えっ日本国」という感じになってしまうのですけれども、ここから発信するので、是非、富士山という大事なスピリチュアルな部分をこうして打ち出すことも、どこかに入れていただけるといいと思います。

矢野委員長： 大変いい案をありがとうございます。

先に藤田さん、どうぞ。

藤田委員： この資料を見させていただいて、先ほど私が意見させていただいたのは多分この部分かなと思ったのですが、言葉に対して私も少し違和感がありまして、「産業人材確保」と言うと、非常にマイナスの感じがします。

人が足りないから何かやらなくてはならないみたいな話ではなくて、ここに書いてある趣旨・目的というのは、逆に趣旨・目的ではなくて、今、静岡県だけでなく日本全体が直面している背景があります。

本当の目的は静岡を活性化していくことが目的で、その背景として、今こういう時代が来ているよということが書かれていて、それでは何をするかといったら、教育の段階から静岡を好きになってもらって、地域を盛り上げる人材を確保して、地域を盛り上げるために、大学に行ってから静岡を教えるとか、その段階で就職やUターンをあっせんするのではなくて、大学を選ぶ段階から、そもそも静岡を盛り上げるために自分はどこの大学に行ったらいいのだろうという流れでないと、大学に行ってからではもう遅いと思います。

ですので、それがこの背景や目的がぶれている理由だと私は思うのですけれども、やることはもちろん人材を確保することなのでしょうけれども、目的は静岡を活性化していくために、子供たちをどうやって育てて、どう戻ってくるサイクルをつくっていくかということを中心に書いて、5年後、10年後、今から始めるのであれば実際に小学6年生が大学へ行って帰ってくるまであと10年ある、じゃあ10年計画の中で、そこに対しての数値的目標もしっかりつくって進んでいくことが望ましいのかなと思っております。以上でございます。

矢野委員長： この計画をつくった委員長として、一つ付け加えますが、その議論は

さんざんありまして、そこでいろいろな意見が出ました。

大学を出て静岡にすぐ戻ってこなくていいじゃないか、日本のために静岡県人が働いてくれば、それは中高生、大学生の誇りになるでしょう。そういう人が、また巡り巡ってしばらくして戻ってきて、若者の指導をしてくれるのもいいでしょう。

そういうふうに広く考えて、静岡県の中にいるから静岡県人なのではないと。日本や世界に雄飛して「私は静岡県人である」という人が多くなればなるほど静岡県は豊かになるという議論もございまして、「県外に出た人は全部帰ってこい」ということにはならなかったのです。お説のような説もたくさんありまして、せつかく人を育てるのであれば静岡に優秀な人に戻ってきてもらいたい、これは皆の切なる思いなのです。

けれども、それだけでいいのかということで、このような表現になりましたので、十分今の御主張の点は組み込まれているつもりであります。御理解いただきたいと思えます。

矢野委員長： それでは加藤さん、どうぞ。

加藤（暁）委員： 先ほどの「ジャパニーズ・ドリーム」という言葉ですが、私ぐらいの還暦に近い人間は「ジャパニーズ・ドリーム」というと、第2の経済大国を目指したときに持っていた「ジャパニーズ・ドリーム」をついつい頭に思い浮かべてしまうので、例えば「21世紀型ジャパニーズ・ドリーム」とか、「新ジャパニーズ・ドリーム」とか、何かそういうふうにしたほうが少し未来志向かなという気がしました。

矢野委員長： ありがとうございます。そういう御意見を参考にしながら、PRのことは、よくお考えいただくと思います。

矢野委員長： 竹原さん、どうぞ。

竹原委員： この資料の最後の行ですけれども、「生きる道」としての仕事を究めることの大切さを子供にどう伝えていくかということが、今日は問われていると思っておりますが、実は国際的な調査の結果で、例えば、日本は理科の学力テストは世界有数でトップなのですけれども、もう一つ興味のあるデータを教えていただいたのですが、その理科の知識が実生活に役に立つと思うかというスコアは多分最下位なのです。

つまり、自分の学んだことが社会と結び付かない学びというのは、これから考えなければいけないと思えます。

キャリア教育のように、皆様がおっしゃった地域での学びもそうですけれども、体験的に学んで、そこで得たものは忘れ難い思い出になるし、それが学びとして将来に生かされると思えますので、是非学ぶや

り方や深さというものをもう一回問うような、それは先ほど副委員長がおっしゃってくださったように、大人がそれを共有していかないと  
いけなくて、学校の先生方だけではなく、地域も同じことを考えなが  
ら動いていかなければ、それはできないと思っています。

先ほど紹介できなかつたのですけれども、私たちは「10年後の社会  
塾」というテキストを作ってキャリア教育の推進をしているのですが、  
これを誰が読むかという、企業の方、ボランティアの方、地域の方、  
行政も含めた様々な方、そして先生が読み、保護者が読み、同じもの  
を共有しながら子供を育てるというものを一つのツールとして作って  
います。

それから、共通認識を持つことでは、キャリア教育や地域との連携に  
関わったあらゆる組織の方とか個人の方、そして先生方、保護者が一  
堂に会してワークショップをしたり、情報共有をしたりする場を必ず  
年度末に持つのです。そうすると、一事業所として受け入れている方  
も、ほかの方と出会う、「ほかはこんな工夫をしている」とか、  
「こんな学び方をしている」というのが共有できていいのではないか  
と思って、そういう試みをしていますけれども、子供たちのために大  
人が少し変わっていかなければいけないと思っています。

矢野委員長： ありがとうございます。

今日の議論で足りなかつたことは、先ほども申し上げましたが、ま  
た次回も取り上げていきたいと思っておりますので、そこでいろいろと御検  
討を賜ればありがたいと思っております。

今日いただきました御意見は、総合教育会議の場で知事から県教育  
委員会に御提案をいただくこととなりますが、次回の総合教育会議に  
は池上先生にも御出席いただいて、今日の議論の模様について御説明  
を賜りたいと思っております。

それでは、最後に知事から一言お願いいたします。

川勝知事： 時間が超過する形で熱心に御議論賜りまして、誠にありがとうございました。

高校生が平成28年度で、この日本でトップクラスの技、能力を見せ  
て、それが25件にも上ったというのは、1カ月に2件ぐらいあるとい  
うことですね。これは皆様方にとっても大変プライオリティなデータ  
であったということを知りまして、これはもっとPRしなければいけ  
ないと思われました。

それから同時に、地域学について、ここに定義が書いてあるのです  
が、「地域の自然、人、事象などを学ぶことによって、郷土観を確立  
し、ひいては地域活性化や地域づくりを図っていく学習活動」という  
ふうに、この地域学の37ページに書いてあります。

それはそのとおりなのですけれども、先ほど加藤さんがおっしゃっ

たように、実は日本でやっている農業にしても、工業にしても、あるいは林業にいたしましても、林業は若干問題が特殊かもしれませんが、いわゆる第1次産業、ものづくり、実はこれは世界でトップクラスなのですね。

ですから、首都から学びに来られるわけです。ですから、従来の郷土愛だけではなくて、実は国際的に開かれた地域学だということなのです。

そうしたものは、もちろん高い知性、例えば理学だとか数学とか、そういうものにおいては世界的にありますけれども、この技芸、将棋もそうでしょう、バレエもそうでしょう、バイオリンもそうでしょう、そして宮城先生がなさっておられるような演劇もそうでしょう、こうしたものが実は匠の技芸として、トップクラスで学ばれる対象になっているのです。

そうしたものをメニュー型で、わかる形でするのが実は地域学なのです。酪農もそうです。漁業もそうです。あるいは、ボランティアでいろいろなことをすることもそうです。こういう意味で技芸を磨くというのは、静岡県のためになりますけれども、実は日本内外、国際的にも役に立つという観点で考えております。開かれた地域学ということですね。

「ジャパニーズ・ドリーム」というのは、渡部さんも文芸大を出られたと、今、池上先生は副学長をされていらっしゃるわけですが、去年、総代で出た子が答辞で、立派な答辞を読んでいた。途中で「母国語で少し話します」と言いまして、1分ほど話して、はらはら涙を流すものですからみんな驚きまして、また気を取り直してきちっと結んで、答辞を学長に渡して降壇したわけですね。

そこで、「自分は10歳のときに出稼ぎで来た。出稼ぎで来た自分だけども、ここまでできたのよ。お母さんありがとう。」と言ったということです。お母さんは答辞の立派な日本語はわからないから、ポルトガル語で言ったその言葉を、恐らく保護者席でお聞きになっていたに違いありません。

つまり、彼女の夢は一つかなったのです。立派な会社に勤めました。だから、ドリーム・カム・トゥルー・イン・ジャパンなのですよ。

ですから、こういう誰にとっても差別なく、区別なく、ここで学ぶことを通して立派な人間になっていけるということです。

静岡の人間が出ていって、静岡のことを知らないまま仕事をしていくという状況がありますので、私どもは過去1年半の間に17の大学、県外の大学と協定を結びました。

高校を卒業していったときには、大体、学校と家とクラブぐらいしか知らないですよ。どういう産業がある、どういう地域の実態があるというのは知らない。それを知らせると同時に、向こうは静岡県の若い青年たちが来てくれるから、協定は大変喜ばれるわけです、もっと

来てほしいと。

私どもはそれを知らせることを通して、県外の青年たちにも静岡のことを知っていただいて見に来ていただくという、そういうことを考えておきまして、また県外というのは、国内だけではなくて、実は海外も受け入れております。

ですから、自分たちの持っている、例えば演劇でも、ここに海外も、いわば演劇の都として来ているわけでしょう。そうしたことは実は農業におきましても、あるいは漁業におきましても、十分に成り立つということです。

知性を磨くというのは、人間の誇りです。基礎的な真理を追求するというのは、とても尊いことです。それともう一つ、技芸を磨くというのも大変重要なことで、相並ぶと。今まで少し偏差値に行っちゃっているんで、もう少し技芸のほうを尊重しようということです。

それから何と言いましても、「道」という言葉によく経済産業部が気付いてくださった。これは矢野さんの御指導のおかげではないかと思うのですけれども、生きる道というのは、いろいろな広がりがあります。

これを生業として、今かつかつの生活を支えているという意味での生きる道もありますでしょうし、自分は生きる道としてこの道を究めたいというものもございますでしょう。

だから、生きる道を学んでいるのだということを、こういう形で職業教育の中に入れていくという、そこはよかったと思います。

「ジャパニーズ・ドリーム」は経済大国のときにも使われたのですか。知らなかったです。私は「チャイニーズ・ドリーム」の帝国主義は、けしからんと思っていましたので。ですから、ああいう強がりとは終わったと。アメリカン・ドリームは今陰りが差していますでしょう。「ああいうやつ」というふうに、今、イスラム教徒を見てしまうわけですから。

静岡はハラールのパンフレットを作りました。コーシャも作りました。コーシャというのは、ジューイッシュの方たちですね。全国で初めてです。ですから、ジューイッシュの方たちも、イスラムの方たちも、その他ベジタリアンも何もかも、431の食材があるから、みんな楽しめます。「それを作っても結構ですよ」という形で区別をしない。

つまり、世界がここにあるのだという、言わば日本のミニチュアとしての静岡をつくっていくということで、それが真に開かれた郷土愛になるのではないかという姿勢が、十分ではありませんけれども、こうした文言の中に込められているということでございます。

地域というのは何か。これは、地球を何らかの基準で区切ったら地域になるのですよ。温帯地域と寒帯地域とか、近隣と地域とか。だから、地域より大きい、あるものより大きくなるのは地球です。地球を何らかの基準で区切ったものが地域になります。ですから、グローバ

ルに考えてローカルに行動するという言葉がありますが、グローバルとローカル一体で最近ではグローバルという言葉もあるようですけれども、そのような観点に立った地域学なのです。

地域には常に人が生きていますので、実践というものがあります。その実践を支えているのは生業です。この生業の中に技がある。

しかし、一方で生業というのは、演劇とか、スポーツとか、囲碁とか、将棋とか、こういうものも入っていますから、技芸というものをもう一回見直したいと。

こういう観点で、いわば学術と技芸のバランスを持たせていきたいと思っているところであります。そして、立派な人間をつくっていくと。

今日は富士山が見えましたよ、この時期に。

「おまえの言っていることは正しい」と言ってくれている。どうも富士山、ありがとうございます。以上でございます。

矢野委員長： 知事の席は特等席でしたね。どうもありがとうございます。

それでは、これで本日の議事を終了しますので、事務局にバトンタッチします。

事務局： 皆様、長時間にわたりまして活発な御議論をありがとうございました。

第2回実践委員会は9月の開催を予定しております。詳細につきましては、後日事務局から御連絡をいたします。

それでは、以上をもちまして第1回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を終了いたします。皆様、お疲れさまでございました。ありがとうございました。